2018 年度

点検・評価報告書
ーアセスメント結果の概要ー

通信教育部

通信教育部

2018（平成 30）年度　自己点検・評価報告書

Ⅰ．現状の説明

はじめに

通信教育部では、全学的アセスメントポリシー及びアセスメント項目に対応しながら、有意かつ効果的なアセスメント活動を行い、学修成果の測定・内部質保証体制を推進している。

通信教育部におけるアセスメント実施方法等は下記の通りである。

①「知識基盤：幅広い知識と高度な専門性」に関するアセスメント指標として「成績（GPA）分布及び単位修得数の年次変化」について、過去 5 年間の正科課程の在籍 5 年以内卒業生の成績及び単位修得数を集計し、分析を行う。

②「授業レベルでの全学的な取り組み」に関するアセスメント指標として、「授業外学修時間の経年変化」を含む「夏期、秋期、地方スクーリングにおける授業アンケート結果の経年変化」について、アンケートを開始した 2011 年度以降の結果を集計し、分析を行う。

③その他のアセスメント指標として、「在籍者数」、「退学率」、「教員採用試験合格者数」の経年変化について、2010～2018 年度の各数値を集計し、分析を行う。また、「学生参加型の内部質保証」の取り組みとして、光友会から人選した代表者と、アセスメント結果などを交えて意見交換を行う予定になっている。

現状の分析

１．成績（GPA）分布及び単位修得数の年次変化について

a. 卒業生の状況

卒業生の在籍年数の変移を確認すると（図１）、6 年以上在籍した学生は減少傾向にある。また、5 年以内卒業生との人数差の幅は年々縮まってきている。

次に、5 年以内の在籍者に焦点を当てて卒業状況を確認すると、5 年間かけて卒業した学生は減少傾向にあり、一方、4 年間で卒業した学生はやや増加している。以上のことから在籍規定等を見直したこと等により、4 年間で卒業するという意識改革が進んでいると考えられる。

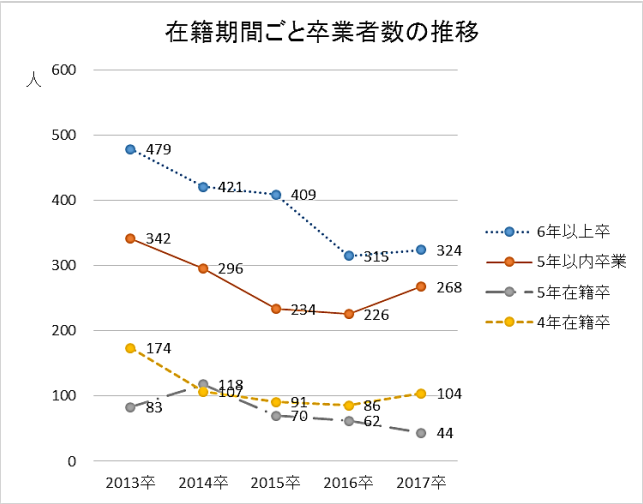

図１　在籍期間ごと卒業者数の推移

b. 卒業時の通算 GPA

在籍 5 年以内の卒業生の卒業時の通算GPAの経年変化について確認（図２）すると、中央値は2014年に下がったもののそれ以降は上昇傾向にある。また、25 パーセンタイルおよび 75 パーセンタイルも上昇傾向にある。

以上のことから、全体的に卒業時の通算GPAが上昇しているといえる。

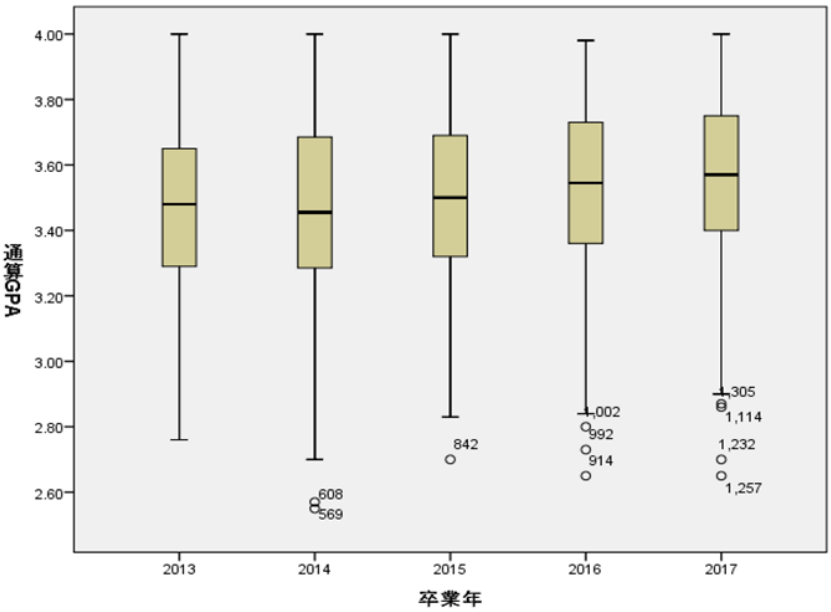

図２　卒業時の通算 GPA の経年変化

c. 年齢別 卒業時通算 GPA の推移

ここで示す年齢とは、卒業時点での年齢である。年齢別の推移に関しては、80 代の人数がとりわけ少ないため、ばらつきが大きいがそれ以外の年齢層には大きな変化は見られない（図３）。

第１に、80 代の学生でも 4～5 年で卒業することが可能であるということ。第２に、中央値で見た場合、20 代の成績、次いで 70 代が全体的に低いということが言える。2017 年度卒業生の内訳を確認すると、3.50-3.99 の階級だった 20 代は 43.3%、70 代は 47.8%と低い。一方、30 代（72.9%）と 40 代（74.4%）の割合が高くなっている。

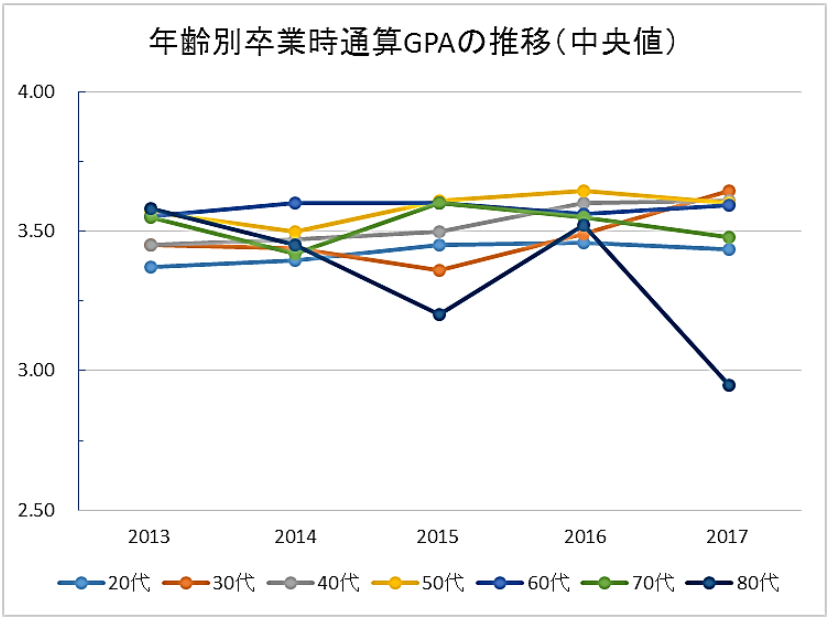

図３　年齢別 卒業時通算 GPA の推移

d. 単位修得数の年次変化

過去 5 年間の正科課程（1 年次入学生）の在籍 4 年での卒業生の単位修得数を集計した結果、2016 年度以前の卒業生は、4 年次に比較的多くの単位を修得している傾向が見られた（図４）。しかし、2017 年度の卒業生は、年次ごとに万遍なく単位を修得しており、計画的に単位修得を行っていることが見て取れる。

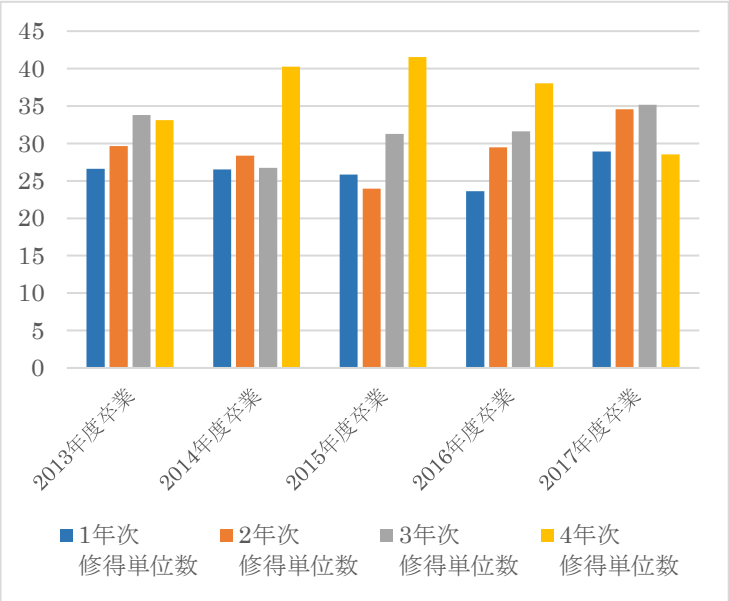

図 4　在籍 4 年間修得単位数の推移

２．スクーリングにおける授業アンケート結果の経年変化について

通信教育部では、スクーリング授業の充実と改善を目的とし、2011 年度夏期スクーリング以降（秋期スクーリングでは 2015 年度以降）、受講生を対象に授業評価アンケートを実施している。

a. 授業理解度と授業満足度の推移

「1-(1)あなたはこの授業を理解できましたか」という質問に対する回答は、2011 年度(平均 3.96 点)の授業アンケート開始以降、上昇傾向を続け、2015 年秋期以降は 4.05 点以上で推移している。一方で、「1-(2)全体評価として、あなたはこの授業に満足しましたか」という質問に対する回答は、1-(1)の数値とほぼ同様に推移しており（図５）、学生の授業理解度と満足度とは強い相関関係があり、「理解度が上がる＝満足度が上がる」と言える結果となった。

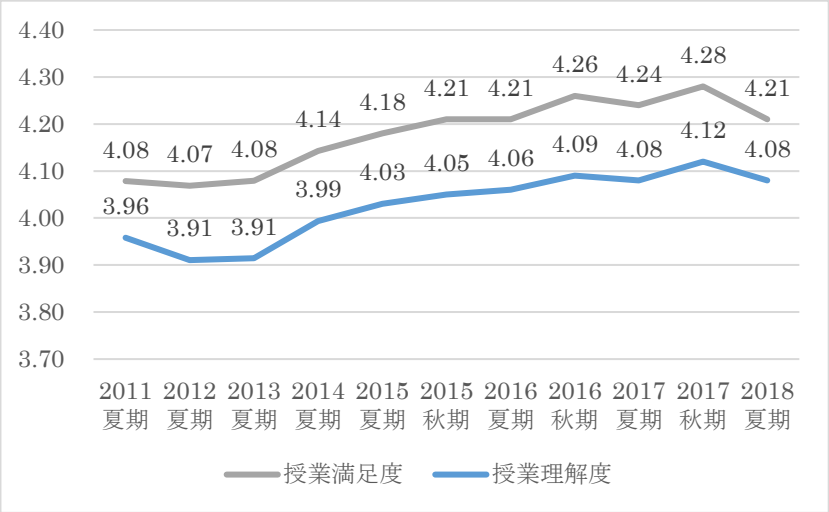

図 5　授業理解度と授業満足度の推移

b. シラバス閲覧率の推移

スクーリング受講者が、学修を始める前にシラバスを見た割合は、2014 年以降 74～80%程度で推移していたが、2018 年夏期に急増（91.82%）している（図６）。この要因としては、2018 年度より導入された「メディア授業振り返りレポート」が全スクーリング科目に必須となったことが挙げられる。振り返りレポートの作成には、シラバスで課題内容を確認する必要があるため、シラバスの閲覧率の急増に反映されたものと推測される。

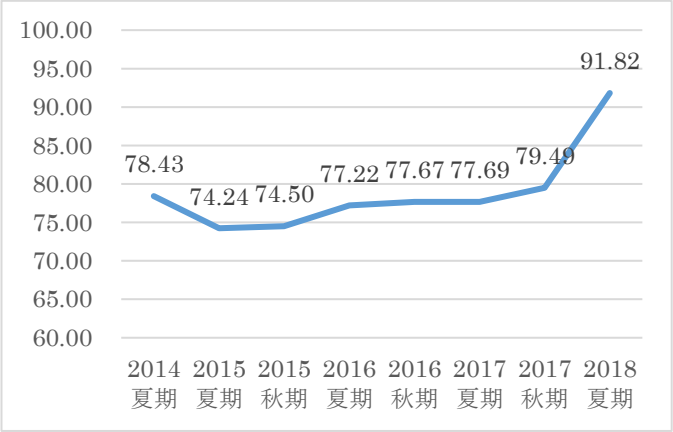

図６　シラバス閲覧率の推移

c. 授業改善の傾向

「3-(1)あなたはこの授業について、教員に質問をするなど意欲的に学習しようと心がけましたか」という設問に対する回答の平均も 2014 年度以降、緩やかながらも上昇傾向にある（図７）。

同様に、「3-(2)教員は学生の質問や意見を適宜聴くなど、学習を支援する努力をしていましたか」との設問でも、ほぼ同様の推移を辿っている（図８）。

学生側の「意欲的に学習しようと心がける」姿勢と、教員側の「学生の質問や意見を聞く」姿勢の両方が上昇傾向にあることから、授業の形態が、従来の一斉講義型から双方向型またはアクティブラーニング型に変化していることが推測される。

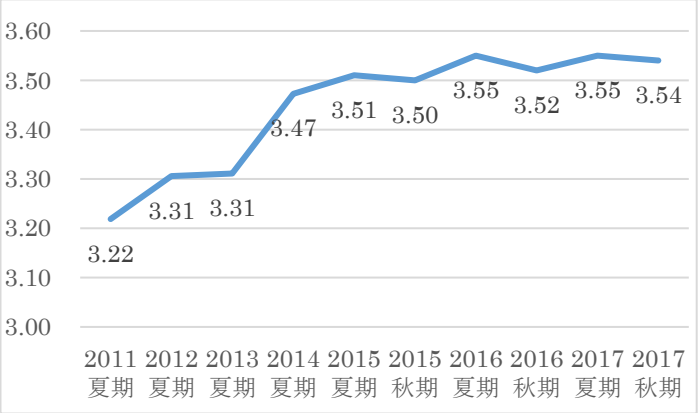

図７　3-(1)自身が意欲的に学習しようとしたか

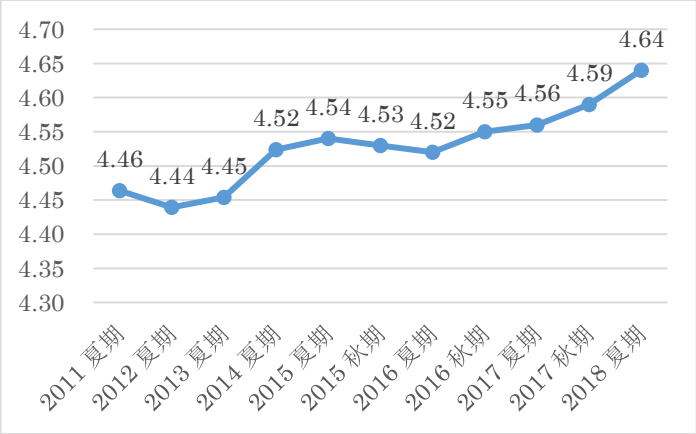

図８　3-(2)教員は学生の質問や意見を聞いていたか

d. 授業外学修時間の推移

2014 年に、教室での面接授業（スクーリング）前に、各自が自宅等で受講するメディア授業（DVD）が導入された。2013 年以前は、スクーリング受講前の予習時間が 0 ～ 1 時間という受講生が全体の 5 割となり、半分ほどの学生がスクーリングに来て初めて、その科目の内容に触れるというのが実情であった（表 1）。

	20 時間以上	10～20 時間	5～10 時間	2～5 時間	ほとんど何もしない	平均
	5	4	3	2	1	
2011 夏期	2.07	3.98	9.00	31.31	53.65	1.70
2012 夏期	3.43	4.66	10.79	31.32	49.80	1.81
2013 夏期	3.70	5.24	11.50	32.05	47.51	1.86

表 1　あなたはこの授業についてどの程度の予習をしましたか

メディア授業（DVD）が導入された 2014 年以降では、9 割以上の受講生がメディア授業を視聴をしてからスクーリングでの面接授業に臨んでおり、さらに 2017 年以降には、約 7 割の受講生が面接授業前にすべての DVD（90 分×5 時限分＝7.5 時間）を視聴している（表 2）。

しかし、厳密に言えば、メディア授業はあくまで授業の一部であり、「授業外学修時間」とは言えない。

	すべての DVD を視聴	3/5～4/5 の DVD を視聴	半分の DVD を視聴	1/5～2/5 の DVD を視聴	全く DVD を視聴しない	平均
	5	4	3	2	1	
2014 夏期	58.23	12.63	7.47	13.95	7.72	4.00
2015 夏期	62.10	10.27	6.72	11.86	9.05	4.05
2015 秋期	66.89	11.43	4.90	9.51	7.27	4.21
2016 夏期	65.88	9.13	6.40	10.58	8.01	4.14
2016 秋期	68.42	9.84	4.40	9.79	7.56	4.22
2017 夏期	68.55	8.72	4.54	10.13	8.05	4.20
2017 秋期	68.57	8.79	4.94	9.75	7.95	4.20

表 2　あなたはスクーリング受講前にどの程度メディア授業(DVD)を学習しましたか

メディア授業以外の学修時間がどれだけ取れているかが、次の項目である。

メディア授業以外の学修時間は上昇傾向にあるとはいえ、平均点が約 2.60 点（3 時間）程度となる（表 3）ため、十分な水準ではない。連続講義の授業形態を取っている通信教育において、予習・復習を含めた授業外学修時間をいかに確保し、促進させるかが、今後の課題となる。

	8 時間以上	5～8 時間	2～5 時間	1～2 時間	ほとんど何もしなかった	平均
	5	4	3	2	1	
2014 夏期	9.27	11.31	21.77	27.11	30.54	2.42
2015 夏期	10.26	10.51	24.65	26.10	28.48	2.48
2015 秋期	12.09	11.15	21.48	25.51	29.77	2.50
2016 夏期	11.80	12.46	23.20	26.32	26.22	2.57
2016 秋期	12.76	12.21	21.26	26.95	26.82	2.57
2017 夏期	11.76	12.27	24.50	26.33	25.14	2.59
2017 秋期	12.92	12.92	22.64	26.38	25.14	2.62

表 3　あなたは、メディア授業以外にどの程度学習（予習・復習等）をしましたか

３．在籍者数、退学率、教員採用試験合格者数の経年変化

a. 在籍者数及び退学率の推移

2010 年度（18,878 名）から 2018 年度（8,565 名）まで、在籍者数の減少が続いている。（図９）その要因の一つとして、2014 年の大規模な制度改革により学修レベルが上昇したことや、2009 年に行った「在籍期間」変更（最長で 12 年）の学則改定により、長年本学に在籍されていた学生が 2021 年の在籍期間の満了前に退学されはじめているという本学独特の事情などが考えられる。

今後の入学者確保への取り組みが喫緊の課題になっている。

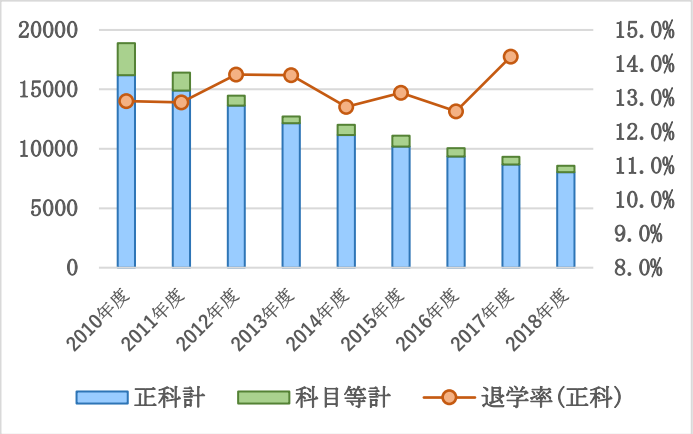

図９ 在籍者数及び退学率の推移

b. 教員採用試験合格者数の推移

2002 年度以降、2018 年度まで 17 年連続で教員採用試験合格者数が 100 名を超えている。（図 11）

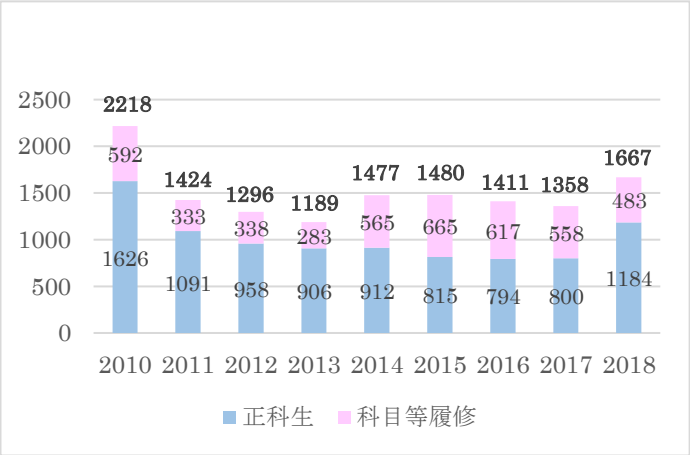

図 10 入学者(合格者)数の推移

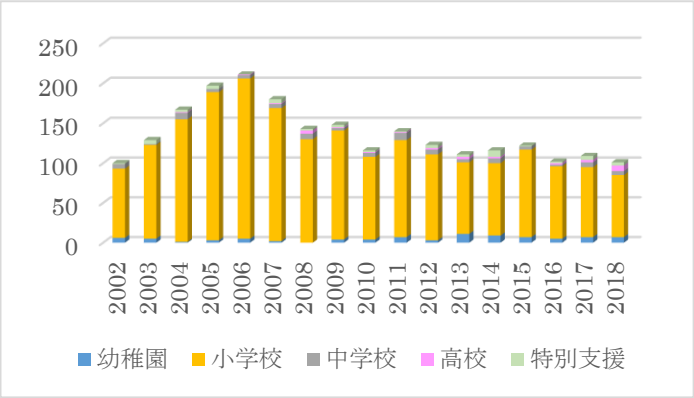

図 11 教員採用試験合格者数の推移

Ⅱ．長所・特色

1．２つの特色

創価大学通信教育部の大きな特色として、「幅広い年齢層の学生が意欲的に学び、卒業している」ことと「教員採用試験合格者数の多さ」が挙げられる。

a．「幅広い年齢層の学生が意欲的に学び、卒業する」

在籍学生の年代別内訳は右図（図 11）のとおりとなっている。60 歳以上の学生が 3 割以上を占め、50 歳以上の学生が 5 割以上を占めているが、現状説明における「1．成績（GPA）分布及び単位修得数の年次変化について」－「c．年齢別卒業時通算 GPA の推移」で述べたとおり、80 代の学生でも 4～5 年で卒業することが可能であり、また、年代別に卒業時 GPA を比較しても、20 代と 70 代の数値が若干低い傾向があるものの、年齢の高低による大きな差は見られなかった。そのことからも、幅広い年齢層の学生が在籍しているだけにとどまらず、「幅広い年齢層の学生が意欲的に学び、卒業している」と言えるであろう。

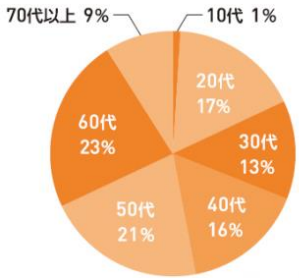

図 11 在籍生の年代別比率（2018 年度）

b．「教員採用試験合格者数の多さ」

「３．在籍者数、退学率、教員採用試験合格者数の経年変化」にもあるとおり、2002 年度から 2018 年度までの 17 年連続で教員採用試験合格者数が 100 名を超えていることは、創価大学通信教育部の大きな特色と言える。2019 年 2 月現在で、教員採用試験合格者の累計は、3,400 人を超え、その人数は卒業生の約 17%に当たっている。

2．アセスメント活動を通じて見えた特色

「Ⅰ．現状の説明」で詳述した通り、これまでのアセスメント活動を通じて、次のような傾向が見られた。

・5 年間かけて卒業した学生は減少傾向にある一方、4 年間で卒業した学生は増加した。
・全体的に卒業時の通算 GPA が上昇しているとともに、2016 年度以前の卒業生と比較し、2017 年度の卒業生は、計画的に単位修得を行っている。
・スクーリング受講者が、学修を始める前にシラバスを見た学生の割合が、急増した。
・学生側の「意欲的に学習しようと心がける」姿勢と、教員側の「学生の質問や意見を聞く」姿勢の両方が上昇傾向にある。

これらの要因としては、2014 年度の制度改革において、メディア授業の導入、レポート作成方法などのアカデミックスキルを基本から学ぶ「自立学習入門」の拡充、カリキュラムの変更、履修制限（年間 40 単位上限）、単位修得有効期限（最大 2 年間）、全科目のシラバスの作成・公表など

の取り組みを開始したことにより、入学から卒業までの計画的な履修や単位修得が必要になったことや、レポート作成講義や新入生ガイダンスなどの学修サポートの拡充、従来の一斉講義型から双方向型またはアクティブラーニング型に変化していることなどが挙げられる。また、それらの取り組みを通じて、教育の質保証、教育の改善が着実に進められていると理解される。

Ⅲ．問題点

現状の課題の一つとして、授業外学修時間の不足が挙げられる。「現状の説明」の「２．スクーリングにおける授業アンケート結果の経年変化について」－「d. 授業外学修時間の推移」にある通り、メディア授業（DVD）を導入した 2014 年以降では、９割以上の受講生が面接授業前にメディア授業を視聴し、2017 年以降には、約７割の受講生が面接授業前にすべての DVD (90 分×5 時限分＝7.5 時間)を視聴するようになった。しかし、「授業外学修時間」については、年々上昇傾向にあるとはいえ、2018 年度現在で平均 3 時間程度にとどまっている。

さらに、在籍者数の減少が続いていることが課題として挙げられる。在籍者数減少の要因として、2014 年の大規模な制度改革により学修レベルが上昇したことや、2009 年に行った「在籍期間」変更（最長で 12 年）の学則改定により、長年本学に在籍されていた学生が 2021 年の在籍期間の満了前に退学されはじめているという本学独特の事情などが考えられる。今後の入学生確保への取り組みは、喫緊の課題となっている。

また、ICT 化による学修環境の充実を進めるのと並行して、サポートデスクの開設や WEB 学習相談会などを実施しているが、ICT 化に対応・適応できない学生に対する支援や対策の拡大が急務となっている。

Ⅳ．全体のまとめ

通信教育部では、2014 年度以降、メディア授業の導入やシラバスの改善、授業方法や教材の見直し、レポート作成講義や新入生ガイダンスなどの取り組みを通じて、教育の質保証、教育の改善を進めてきた。その結果、スクーリングの事前学修時間やシラバスの閲覧率が大きく向上し、それに伴い、学生の授業理解度・授業満足度が上昇したと理解される。

一方、現状の課題として、授業外学修時間の増加が上げられる。大学として学生の主体的学修への意識や意欲をより高め、授業外学修時間を増進させるためのさらなる対策や取り組みが必要と考えられる。また、在籍者数の減少が続いており、今後の入学者確保への取り組みが大きな課題となっている。